



甘味女子は異世界で
ほっこり暮らしたい

黒辺あゆみ

Ayumi Kurobe

RB

レジナ文庫

登場人物紹介

デニス

領主の息子。
父親の権力を使って
「なごみ軒」を乗っ取るとする。

ゲッテンズ

洋菓子店の店主。
ある悩みを抱え、
「なごみ軒」へ訪れた。

ケネス

小梅が作るだんごの味にほれ込み、
居候することになった男性。
普段はあまり感情を出さないが、
美味しいもののお話になると
饒舌になる。

エイベル

ケネスの兄。
少々突飛な行動をとるが、
頼りになる男性。

緋盛セルマ

小梅の祖母。
女手一つで小梅を
育ててくれた。

緋盛小梅

実家のだんご屋「なごみ軒」と
共に異世界へトリップして
しまった女子高生。
寂しがりやだが
前向きな性格をしており、
異世界でも元気に
店を切り盛りしている。

目次

甘味女子は異世界でほっこり暮らしたい

7

書き下ろし番外編

客人来たる

315

甘味女子は異世界でほっこり暮らしたい

第一章 いつの間にか移転しました

稲盛小梅は現在十八歳、もうじき高校を卒業して社会人となる乙女である。

卒業間際のこの時期、すでに授業は終わっており、友人とは登校日に顔を合わせる程度だ。そのため、今日は仲の良い者で集まってお別れ会をすることになっている。

そろそろ家を出る時間が迫っているのだが、小梅はまだ準備が終わっていないかった。

「おばーちゃん、私のバッグ知らない!？」

「なあに小梅ったら、まだ準備できていないの?」

バタバタと居間を覗く小梅に、テレビを見ていた祖母が呆れた顔をする。

「バッグなら、自分でそこに放っておいたでしょうに」

「あー、あった! 良かったあ」

祖母が指し示した先に、探していたバッグが置いてある。財布が入ればなしかったので、これが見つからないと出かけられなかったのだ。

「小梅は本当におっちょこちょいねえ。いつになったら落ち着くのかしら」

困ったようにため息をつく祖母に、小梅は「いっつ!」と歯を剥き出しにする。

「私だって、もうすぐ大人の女になるんですぅ〜!」

「大人の女っていうのは、ある日突然なれるものではないのよ」

小梅の負け惜しみに、祖母が正論で返す。

大人の女を夢見る小梅は、百五十センチ未満という低身長に童顔である。肩まである黒髪をおさげにしていることも相まって、中学生に思われがちだが、正真正正十八歳だ。

そんな小梅の家族は祖母だけ。両親は幼い頃に交通事故に巻き込まれて死亡し、祖父もそれと同時に病気で亡くなった。小梅に残されたのは、たった一人の家族である祖母と、祖母が営むだんご屋の「なごみ軒」だ。最近では老舗の和スイーツ屋として地元紙で紹介されることもある。

「なごみ軒」は祖母が祖父と一緒にはじめた思い出の店で、小梅にとっても大事な場所である。高校を卒業したら、小梅も一緒に店を切り盛りするのだと決めていた。

だから、高校は調理科のある学校を選んだし、飲食店経営に必要な資格も調べている。小梅は早く一人前になって、祖母に楽をさせてあげたいと思っていた。

しかしそんな思いも空しく、未だに落ち着きがない小梅である。

出がけにバタバタしている様子を見て、祖母が声をかける。

「ほら、バスの時間は大丈夫なの？」

「あ、マズイ！ 行つてきまーす！」

「楽しんでいらつしゃい」

慌ただしく家を出た小梅を、祖母が微笑んで見送る。

小梅は店舗兼住宅のだんご屋「なごみ軒」の裏口から飛び出し、バス停に向かって道を急いで駆け下りた。

——ヤバい、乗り遅れる！

必死で足を動かし、なんとか無事にバスに乗る。こうして待ち合わせに間に合った小梅は、友人たちとの語らいを楽しんだ。卒業するのは寂しいが、これから祖母と一緒に働く明るい未来に思いを馳せる。

しかし運命の歯車は、一本の電話によって違う方向に動き出す。

「……え、いま、なんて？」

それは祖母が交通事故に遭って、病院へ搬送されたという知らせだった。

——おばーちゃん！

小梅の脳裏に、笑顔で送り出してくれた祖母が蘇る。

事故に遭ったといっても、案外軽い打撲程度かもしれない。自分にそう言い聞かせながら、真つ青な顔で病院へ駆けつける。

そんな小梅を迎えたのは、すでに帰らぬ人となった祖母の姿だった。

「おばーちゃん、これから一緒にお店をやるうと思っていたのに」

慌ただしく通夜と葬式を終え、小梅は日が暮れた頃に家に戻ってきた。今は、仏壇の前で泣きながら祖母の遺影に語りかけている。

祖母は足腰もしゃんとしていて、老いなんて感じさせないパワフルな人だった。

それなのに買い物帰り、居眠り運転をして歩道に突っ込んできたトラックから、子供を庇って犠牲になったのだ。

卒業式を数日後に控え、「さあこれからだ！」という時に、祖母が両親と同じく交通事故で亡くなるなんて、考えてもいなかった。

「おばーちゃん、おばーちゃん！」

通夜や葬式では、色々とすることがあつて泣くどころではなかった。

けれど改めて一人になった今、祖母がいない事実が嫌でも小梅の心に迫る。

小梅は遺影を胸に抱き、いつも祖母が身に着けていたペンダントを手にする。

それは深い緑色の石の中に星の輝きのような光がある、不思議なペンダントだ。
『おばーちゃん、これ綺麗な石だね』

子供の頃、小梅が聞くと祖母は意味ありげな笑みを浮かべてこう言った。

『これはね、神様にもらったのよ。いつか小梅に譲るから、その時は大事にしてね』
祖母なりのお茶目だったのだろうが、幼い小梅は『神様にもらった』という言葉にと
きめいたものだ。

結局なんの寶石かはわからず仕舞いだったが、小梅は他にこんなものを見たことが
ない。

なんにせよ、これは大事な祖母の形見だ。

「おばーちゃん、今日は一緒に寝てくれる？」

自分の部屋に戻る気になれない小梅は、鼻をグスグスといわせながら遺影に語りかけ、
仏壇の前に布団を敷く。そして枕元に遺影とペンダントを置くと、コロンと横になる。

それからしばらく寝付けなかった小梅だが、外で降り出した雨の音を聞いているうち
に、いつの間にか寝入っていた。

『寂しがり屋の小梅に、新しい人生が訪れますように』

祖母のそんな声が聞こえた気がした。

そしてその日の深夜、「なごみ軒」のあたりが明るく光ったのを、近所の住人が目撃
したという。

チュンチュンという小鳥の爽やかな鳴き声に、小梅は目を覚ます。

——顔が痛い……

起きて一番に思ったのはこれだ。きつと泣きすぎて、顔が酷いことになっているだろ
う。モソモソと布団から這い出て、顔を洗いに洗面所に行く。

「やっぱり、こうなるよね」

鏡に映っている顔は目元が腫れて真っ赤になっているし、全体的にむくんでいる。
春先のまだ冷たい水は顔を冷やすのにちょうどいい。

——人生で一番泣いたかも。

両親や祖父が亡くなった時、小梅は幼すぎて死というものが理解できなかった。だが
ら祖母の死はある意味、小梅が初めて直面した身内の死なのだ。

昨日までは悔しさと悲しきで頭がぐちゃぐちゃだったが、沢山流した涙と共に、気持
ちがほんの少しだけ整理できた気がする。

祖母が亡くなったのは悲しいし寂しいけれど、小梅はこれから一人で生きていかなば

ならないのだ。

「泣いてばかりじゃダメだよね」

きつと夜になればまた寂しくて泣いてしまうだろうが、昼間くらいはちゃんと今まで通りの生活をしよう。

それに大泣きしたからか、お腹がすごく減っている。

『どんな時だって、お腹が減るなら案外平気なもんだよ』

そんな祖母の声が聞こえる気がする。嫌なことがあって落ち込んでいても、食欲があるなら大丈夫だと、いつも励まされたものだ。

——とりあえず、朝ごはんを食べよう。

小梅は寝間着のまま台所へ行き、冷蔵庫を漁る。祖母が朝はパン派の人だったので、食パンのストックがあった。それと卵とハムもあるからハムエッグにでもしよう。

手早くハムエッグを作りながら、食パンをトーストする。電気ケトルで沸かしたお湯でインスタントスープを作れば、立派な朝食の出来上がりだ。

ダイニングテーブルの席に着こうとしたところで思い立ち、仏間から祖母の遺影を持ってきて正面の席に立てかけた。いつも二人で食卓を囲んでいたのに、やはり一人は寂しいのだ。

「おばーちゃん、頂きます」

遺影に話しかけた後、小梅はハムエッグをトーストの上のせて食べた。少しだけ涙の味がするのは、しばらく続くだろうなと思いつつながら。

一人きりの味気ない朝食を終えれば、やることはそれなりにある。

——裏の畑を見に行かなきゃね。

畑ではだんごを作るための米やもち米を作っていた。これらの植え付けはこれからなので水田は空いているが、隅の方で自分たちが食べる野菜も作っている。

野菜の世話をしたり、田植えに向けて水田を整えたり、苗を育てたりする作業が待っているのだが、祖母が事故に遭ったからの数日間、ろくな世話をしていない。

暑い季節ではないし、昨夜雨が降ったからいいようなものの、せっかく育てた野菜が枯れていたら嫌だ。

小梅は、祖母のペンダントを首から下げる。祖母が見守ってくれている気持ちになつたところで、農作業の格好になって家の裏口から畑に出た。

家は小高い丘の中腹に建っており、畑からは麓の商店街が見えるはずなのだが……何故か小梅の視界に商店街はなく、代わりに広大な森が広がっている。

「……は？」

思わず、小梅の口から間抜けな声こゝろが漏れた。

昨日までであったはずの街並みは、一体どこへ行ったのか。まさか一夜にして全て解体されたわけではあるまいに。それに、こんな森だつて昨日まではなかった。

——表の方はどうなってる!?

慌てて店舗の入り口に回ると、そこは道路に面しているはずなのに、野原が広がっていた。この店以外、見事になにもない。

「ここ、どこよ……?」

小梅は呆然とするしかなかった。

電線も、アスファルトも、車も走っていない。自然の中にポツンと「なごみ軒」が建っているだけだ。

いや、よく見れば森の中に遺跡のような建物の残骸ざんがいがあるし、目を凝こらせば遠くの方に街っぽいものが見える。だが、どちらも見覚えのないものだった。

そもそも、店はいつからここにあったのか。小梅は起きてからずっと、窓の外なんて確認しなかったが、まさか起きた時はすでにこの状態だったのか。

「でも、電線とかないわりに、家電は動いたよね」

そう、トースターや電気ケトルはちゃんと使えたし、ハムエッグを焼く時にはガスだつ

てついた。水は丘の上にある湧き水から引いているから別としても、電気やガスはどこから来ているのか。

色々なことが謎だらけで、小梅は途方に暮れる。

「……とりあえず、畑仕事しようかな」

一先ひとまず、現実逃避のために畑いじりをはじめ。

しかし、しばらくしてこのままではいけないと思ひ直し、丘を下りてみることにした。——でも、なんにもないなあ。

やはり近くには森、遠くには街っぽい景色が見えるだけで、近所に民家らしきものは見当たらない。

森の方から続いている道があるが、それはアスファルトや石畳などの整えられたものではなく、人が通って踏み固められ、自然とできたもののようにだ。

標識たぐいの類はなにもなく、どこへ続くのかわからないので、この道を進んでみるには勇氣がある。

「今日はここまでしておこう」

結局、道の存在だけを確認して、家へと戻った。

それから外に出るのがなんとなく怖くなって、家の中を掃除して回った。通夜だ葬式

だと慌ただしくて、掃除どころではなかった家の中が綺麗になった。

掃除の後にはパンとコーヒーで昼食を済ませ、午後は居間で寝転んでテレビでも見ようかと考える。だが、どのチャンネルも映らない。

——電波が届かない場所なの？

仕方ないので、小梅は録画した番組を見て過ごす。

こうして、どこだかわからない土地に放り出されてから、早くも日が暮れようとしていた。

小梅は朝と昼の食事を適当に済ませてしまったので、夕食はちゃんとご飯を炊いておかずも作ることにする。

メニューは、祖母が好きだったカブのそぼろあんかけだ。

小梅は先程畑で収穫した小カブを綺麗に洗うと、葉と根元の汚れた部分を切り落とし、適当な大きさに切り分けた。続いて鶏ひき肉と酒を入れた鍋を火にかけてそぼろにし、そこに適量の水とカブを入れる。煮立ったらアクを取って調味料で味を調え、柔らかくなるまで煮た。最後に刻んだカブの葉を加えて軽く火を通し、水溶き片栗粉でとろみをつければ完成だ。

そぼろあんの優しい香りが食欲をそそる。

——うん、うまくできたけど、作りすぎちゃった。

つい今まで通り二人分の分量で作ってしまった夕食に、小梅は苦笑する。けれど明日の朝の分だと思えば問題ない。

カブを煮込んである間に味噌汁も作ったし、後は冷凍保存してあった魚をグリルで焼いて大根おろしを添えれば夕食の出来上がりである。

食卓に料理を並べ、向かいの席に置いた祖母の遺影に手を合わせる。

「頂きます」

小梅ははじめにカブのそぼろあんかけに箸をつける。

このホロホロと崩れるように柔らかいカブの食感が、祖母は好きだった。それに小梅が作る料理なら、たとえ失敗しても『美味しい』と言って食べてくれていた。

思い出の料理を口にして、小梅の目元がウルウルしてくる。

「おばーちゃん、わけわかんないことになっちゃったよ……」

小梅は食事をしながら、祖母の遺影に困ったように語りかける。

自分は一体どこにいるのか、何故こんなことになったのか。わからないことはかりだ。一方で電気もガスも使えるし、水も出る。食料がもつ心配ではあるが、当面は畑の野菜でなんとかなるだろう。

「一先ずは生きていけそうなことは確かだった。」

——難しいことは明日にしよう。

結局、小梅は問題を先送りすることにしたのだった。

こうして夕食を終えて風呂も済ませ、仏壇の前に布団を敷いて寝ようとしていた時のこと。

ドンドンドン！

店舗部分の方から、雨戸を叩く音がする。

「え、なに？」

布団に寝転がっていた小梅は驚いて飛び起き、店舗部分に向かった。

近辺に家などないのに、一体誰が雨戸を叩いているのか。もしくは森が近くにあるので、野生動物の可能性もある。

どちらにせよ、思いもよらない事態に小梅は恐る恐る店舗の方を覗く。

ドンドンドン！

まだ雨戸を叩く音は続いている。

もし叩いているのが人だったら、ここがどこなのかなど話を聞けるかもしれないが、その人が悪人ではないとは言いかねない。

怖気づいた小梅は、雨戸を開けないまま立ち尽くしてしまう。

——そうだ、裏口からちょっと様子を見よう。

怖そうな人だったり動物だった場合、速攻家の中に戻ればいいのだ。

そう決めた小梅はパジャマの上に着用織り、畑に面した裏口から外に出る。

街灯がないため、周囲を照らすのは月と星の明かりのみ。そんな暗闇の中、小梅は恐る恐る店の玄関に回り込み、そうつと覗く。

すると、店の入り口前に人影が見えた。

ドンドンドン！

「夜分に申し訳ない、誰かいらないか？」

雨戸を叩きながら発する声は、若い男のものだ。暗がりでも、小梅よりも頭一つ分以上背が高いのがわかる。

「傷を癒すため、休ませてもらいたいのだ。厩の隅でいいから、お願いできないだろうか？」

暗いのでわからないが、酷い怪我でもしているのだろうか。

このあたりに他の建物がないのは、昼間に確認している。つまり、休める場所はここ以外にない。

怪我の身で野宿というのも可哀想な気がする。けれども、あの男が悪人ではないという保証がどこにあるのか。

——おばーちゃん、どうしよう!?

小梅が助けに行くことも、家の中に戻ることもできずにオロオロしていると、突然胸元が眩く光った。

「なに!？」

いきなりのことに驚きながらパジャマの胸元を覗き込むと、祖母の形見のペンダントが光っていた。

「これ、なんでこんなに光っているの?」

引っ張り出したペンダントは、夜の暗闇の中で幻想的な光を放つ。

「すまない、その娘」

「……あ」

ペンダントの光に氣をとられていた小梅は、そう声をかけられるまで男の存在を忘れていた。

「失礼だが、この家の住人だろうか?」

店の入り口前から、男が真っ直ぐに小梅を見る。

「夜分に訪れて申し訳ない。俺はケネス・シャノンという」

「あ、どうも、稲盛小梅です」

名乗ってきた男——ケネスにつられて小梅も自己紹介してしまう。

「実は森で素早い魔獣まじゅうに襲われ傷を負い、辛うじてここまで逃げてきたのだ」

そう語るケネスは脇腹を押さえているので、そこを怪我しているようだ。

熊や猪に襲われて怪我をしたというニュースを思い出し、そういうことだろうと小梅は考える。

——けど、マジウってなんだろう? 猛獣もうじゅうの類似語にそんな単語があったかな?

小梅が疑問に感じている間にも、ケネスは淡々と言葉を続ける。

「まさかここに家が建っているとは知らなかった。軒先のきさきでいい、一晩泊めてもらえないだろうか、家主に尋ねてほしいのだが」

「家主っていうか……」

祖母が亡くなり、現在家には小梅一人だ。しかし、そんな情報を誰とも知れない男に与えていいものか。若い女が一人だとわかれば、態度を急変させるかもしれない。

その一方で、ここで小梅が「ダメです」と言ったら、ケネスは素直に去るのだろうかと思った。本当に押し入るつもりなら、小梅が一人を出てきた時点でそうすることができ

たはずなのだから。

——おばーちゃん、どうすればいいの!?

しばらくグルグルと考える小梅を、ケネスは静かに待っている。相手を信用してもいいような、でも怖いような気持ちでいた小梅は、ふと思いつく。

——家上げるんじゃないなく、店の畳の上を提供するのはどうかな?

「なごみ軒」の店内にはイートインスペースとして、小上がりの座敷がある。あそこで寝てもらって、店と自宅部分との境のドアには鍵かぎをかければいい。

小梅は解決策を思いつき、気持ちが軽くなった。

「あの、ちょっと待っててくださいね」

裏口から家に戻って鍵かぎをかけた後、店舗部分に行って明かりをつけ、入り口と雨戸を開ける。

「じゃあ、どうぞ」

小梅が招き入れようとすると、ケネスは後ろを振り向いた。

「あと、馬をどこに繋げばいいだろうか?」

「え、馬? 車じゃなくて?」

どうということかと外に出て見れば、店の横に栗毛の馬がいた。馬を生で見るのは初め

てだ。

「馬車をひくような優雅な旅はしていないからな、アイツだけだ」

小梅の言葉をどう捉えたのか、ケネスがそう返す。

——馬車って?」

観光地を馬車が走る映像はテレビで見たことがあるものの、相手の口調からするとそうだった意味ではない気がする。

小梅の頭の中は疑問符だらけだが、とりあえず馬は駐車スペースに入れてもらうことにした。

その後ようやくケネスを店の中に招き入れると、その容姿がはっきりと見て取れるようになった。

金の短めの癖毛に緑の目で、整った容姿といえる。身体をすっぽりと覆うマントのよなものを着ており、はた目には実に怪しい。

「他のご家族は?」

「……えっと、その」

シンとした屋内を見回すケネスに、小梅は言葉を詰まらせた。やはり、小梅一人しかいないことは知られない方がいい。

しかし、ケネスはそんな小梅の態度から察したようだ。「そうか、一人だから警戒していたのだな。娘の一人暮らしに押し入るみたいな真似をしてすまない」

ケネスは深々と頭を下げるものの、表情はあまり変わらない。初対面のせいかちょっと取っ付き難い印象があった。

——西洋人っぽい顔立ちだけど、アメリカとかヨーロッパの人かな。

それにしても日本語がうまい。ということは、ケネスは日本滞在歴が長い外国人で、やはりここは日本なのではないか、という考えが小梅の脳裏を掠めた。

しかし、その考えはすぐに打ち消される。

ドサツ。

ケネスが腰のベルトを外し、細長い棒状のものを床に落としたのだ。棒の大部分が革のケースに収められているが、小梅はなんとなくその正体に察がついてしまう。

——これってもしかして、剣じゃない？

高校の学園祭で、どこかの部活動がファンタジーゲームのコスプレ喫茶をしていたのだが、その時の小道具と似ている気がする。

日本でそのようなものを日常的に持っている人がいるのだろうか。しかもケネスが落

としたものは使い込まれたような跡があり、偽物には見えない。

——ここって、本当に日本なの？　なんか、物語の世界に迷い込んだような気分なんだけど……

衝撃に固まっている小梅を余所に、ケネスは着ている服をさっさと脱ぎ、脇腹の傷の具合を確かめはじめる。

「……っ！」

動物の爪かなにかで抉られたような傷跡に、小梅は息を呑む。

ケネスは淡々と話すし、痛がるそぶりを全く見せなかつたので、もつと軽傷なのかと思っていた。

「きゅ、救急車！　ってどこから来るのよ。とりあえず救急箱、持ってきます！」

小梅は慌てて自宅から救急箱とタオル数枚、そして洗面器を持ってくると、傷口を洗うために洗面器に水を張った。

しかし、これまで直面したことのない大怪我を前に動けなくなってしまう。

「あの、えっと……」

「それを貸してくれ」

うるたえる小梅を尻目に、怪我した本人なのに落ち着いた様子のケネスが、道具を受

け取った。そしてタオルを洗面器の水につけ、緩く絞って傷口を洗う。

「……っ!？」

すると、なにかに驚いた顔をした。

——え、なに？ 傷に沁みただの？

その反応を見てさらに戸惑う小梅に、ケネスが視線をやる。

「この水は、どこの水だ？」

「え、その蛇口の水ですけど……?？」

なんの確認をされているのかわからないが、小梅はトイレの前にある洗面台の蛇口を指す。

「……そうか」

ケネスはそれ以上は追及せず、消毒液を塗り、ガーゼを当ててテープで留めた。

傷が隠れたことで、小梅の気持ちも落ち着く。そしてふとケネスが着ていたシャツに目をやると、傷の箇所が大きく破れて無残な姿になっていることに気付く。

「あの、着替えとかありますか？」

長い間女二人暮らしたたので、この家には大柄な男に貸せそうな服がない。けれどあんな風になった服をもう一度着るのは嫌だろうし、かといって裸では寒いだろう。

「着替えは持っているので、問題ない」

ケネスはそう言って持っていた荷物からシャツを取り出す。けれど彼は傷口を洗っただけで、身体を拭いたりはしていない。

「あの蛇口の水、身体を拭くのにも使ってください」

春先のこの季節に水では冷たいかと思ったが、さすがに厨房のガスを使わせることも、家の風呂に入ってもらうこともできないので、水で我慢してもらおう。

「それと、寝るのはここでお願いします。布団を持ってきますか？」

「なにからなまでにまで痛み入る。布団は毛布を一枚貸してもらえれば十分だ」
座敷の座布団とテーブルを隅に避ける小梅に、ケネスが頭を下げた。

毛布を渡した小梅は、「おやすみなさい」と挨拶をしてから、店舗と自宅の境に鍵をかける。仏間に戻って布団に寝転がるが、睡魔は訪れそうにない。

——ここってやっぱり、日本じゃないよね。

それどころか、現代の地球なのかも怪しい。タイムトリップや異世界トリップをする物語を読んだことがあるが、状況がそれに似ていないだろうか。

「まさか、まさかだよね？ おぼーちゃん」

小梅は祖母の遺影いえいに問いかけた。

結局、小梅はよく眠れないまま朝を迎える。まだ夜明け間もない早朝だが、二度寝する気にはなれなかった。

パジャマから着替えた小梅は、昨日炊いたご飯で作ったおにぎりを焼きおにぎりにして、これまた昨日の味噌汁とおかずの残りで朝食を用意する。

「おばーちゃん、私頑張るからね」

箸を取り、向かいの席に立ってかけた祖母の遺影いえいに語りかけた。

小梅は祖母を亡くした悲しさが、昨日のことで少し和らやわらいていることに気が付く。

いきなりどこか知らない場所に家ごと放り出され、得体の知れない男に助けを求められ、悲しむどころではなくなっていたのだ。

それに、悲しむのはいつだってできる。今はどうやって生きていくのが大きな問題だった。

日本に戻れるのかはわからないが、このまま野垂れ死のたれじにするのは嫌だ。

決意も新たに朝食を食べ終え、畑に水をやりに行く。

とはいえ、昨日手入れをしたばかりなので、あまりすることがない。家の中に入って

も、掃除もやったばかりなので、こちらも簡単に終了する。

というわけで、小梅は早々に暇になってしまった。

「お店、開けようかな……」

そもそも高校での三年間は、「なごみ軒」で働くために学んできたのだ。暇なんていつごろごろしているより、店を営業するのが本来あるべき姿ではなからうか。

「うん、お店を開けよう」

そうとなれば、だんごを作らねばならない。

店で使用するだんご粉は仕入れたばかりだったので、十分にストックがある。

「なごみ軒」では米から作る上新粉じょうしんこと、もち米から作る白玉粉しらたまこをブレンドしただんご粉を使っている。

祖父が生きていた頃は裏の畑で育てた米ともち米で作っていたが、祖母一人になってからは近所の製粉所から仕入れていた。

今でも多少は米ともち米を作っているし、倉庫に製粉用の臼うすがあるものの、自家製の粉のみでは大した数を作れない。そのため小梅としては、これまで通り市販のだんご粉を使うつもりだった。

果たしてこのあたりにだんご粉を売っている店があるだろうか？

——ケネスさんに聞けばわかるかな。
 そう考えつつ、店の制服である和服を身に纏った小梅は、店舗部分のドアをそっと開けて中を覗く。

座敷ではケネスがまだ寝ていた。

——あんな怪我をしていたんだもん、疲れているんだよね、きつと。
 起きるまで寝かせてあげようと小梅は思い、静かに厨房へ入る。

「まずはみたらしを作つて、他のおだんごは様子を見てからにしようかな。量も様子見だから少な目でいいよね」

今日はみたらしだんごだけで営業することにした小梅は、台の上に材料を並べる。
 だんごの作り方は案外簡単で、だんご粉と水を混ぜて捏ねたものを、小さく丸めて茹でるだけだ。

小梅は大きなボールにだんご粉を入れ、水を少しずつ加えながら、耳たぶくらいの固さになるまでしっかりと捏ねる。次に小さく丸めたものを沸騰したお湯に入れて茹で、浮き上がってきたら水に取る。水気をふき取って竹串に刺せば、だんごの完成だ。ちなみに串に刺すだんごの数は店によって違うけれど、「なごみ軒」では三つである。

これを延々とやるのだが、小梅はこの作業が結構好きだ。

「こんなもんでしよう」

そうしてだんごを仕込み終えたところで、次はみたらし餡作りだ。

小梅は鍋に醤油とみりん、砂糖、水を合わせて強火で沸騰させ、みりんのアルコール分をしっかりと飛ばす。砂糖が溶けたら水溶き片栗粉でとろみをつけて、冷ますとみたらし餡の出来上がりだ。

準備ができたところで、だんごを焼き機にセットし、じつくりと焼いていく。香ばしい香りがして良い感じに焼き目が付いたらだんごを皿に上げ、みたらし餡をかける。

できたてホヤホヤのみたらしだんごからは、醤油の良い香りが立ち上っていて食欲をそそられた。

——まずは一本、味見つと。

小梅が温かいみたらしだんごを手にとった時。

「うまそうないだな」

店の方から声をかけられた。振り返ると、厨房を覗き込んでいるケネスがいる。
 小梅はだんごの仕込みに夢中で、座敷にいる人物のことをすっかり忘れていた。

「おはようございます、ケネスさん」

「おはよう、イナモリコウメ」

ケネスにフルネームで呼ばれ、面食らう。ひよっとして苗字と名前の切れ目がわからなかったのだらうか。

「稲盛が苗字で、小梅が名前です。具合はどうですか？」

名乗り直した小梅は、ケネスの怪我や身体の調子を尋ねた。

「傷はまだ痛むが、よく眠れたので頭がすっきりしている。こんなに寝たのは久しぶりだ」本人の言う通り、ケネスの顔色は良いように見える。

ただ昨日もそうだったが、表情が硬く淡々としているため、機嫌が悪いのかと思ってしまう。けれど口調は普通なので、もしかやこれが普段通りなのだらうか。

小梅がケネスをまじまじと見つめていると、あちらも感心するような、痛ましく思うような目線を向けてきた。

「コウメは子供なのに働き者だな」

「……は？ 子供？」

確かに学生という意味ではまだ子供だ。

しかし同じ年齢でアルバイトをして働いている人は大勢いるし、小梅も卒業と共に正式に「なごみ軒」で働くつもりだった。社会人になるという意味では立派に大人の仲間入りだらう。

「もう十八歳ですから、子供というにはちよつと……」

小梅がそう言つて苦笑すると、ケネスは一時停止した。

「十八歳？ 十歳ではなく……？」

本気で驚いているらしく、目を見開いている。

小梅は確かに小柄で、未だに中学生に間違われることがある。しかし、さすがに小学生に思われるのは心外だ。

「十八歳ですっ!!」

「……わかった、十八歳だな」

怒気を込めた小梅に、ケネスが静かに頷いた。

「それよりコウメ、ここは食い物屋だったのか。良い匂いがする」

ケネスがクンクンと鼻を鳴らしながら言う。店内にはみたらし餡あんの香りが漂っているので、食欲を刺激したに違いない。

「今焼けたんです、味見にお一ついかがですか」

「俺には経験のない香りだから興味がある。もらおう」

ケネスが頷いたので、小皿に一つ取り分けてやる。

「どうぞ」

「見た目は串焼きに似ているか」

そう呟きながらだんごを一つ食べたケネスが、衝撃を受けたような顔になった。

「……弾力がありつつ柔らかい……この不思議な食感はなんだ!」

そう叫ぶや否やまた一口に含み、今度はじっくりと味わって食べる。

「白い物体に絡む透き通るような茶色い液体は、塩辛い味の中に上品な甘さがある。いや、この白い物体自体もほのかに甘い……」

それから最後の一つを口にする、なにかを悟ったかのような表情になり……

「そうか、これが食の芸術か!」

などと歓喜の声を上げ出した。

「……えっとお」

小梅はだんご一本にこれほど饒舌じょうせつになる人を初めて見た。というより、小梅はなんとなくケネスにサイボーグ的な印象を抱いていたので、感情的にもなれるのかと新発見した気分である。

「もう一本、食べます?」

「ぜひ、頂こう!」

小梅の問いかけにケネスが即答した。



けれどだんごが朝食代わりというのもあんまりだろうと、小梅はおにぎり味噌汁の残りも用意する。

すると、ケネスは訝しそうな表情を見せた。

「見たことのない食事だな」

「このおにぎりは、白いおだんごと原材料は同じですよ」

「ほう!？」

そう説明したとたん、ケネスは俄然興味深そうにおにぎりを観察し出す。

——いや、観察しないで食べななな。

内心でツツコミを入れていた小梅は、ふと気付く。

——そういえば、こんな風にも人とお喋りしたのは久しぶりだ。

祖母の通夜や葬式では近所の人が気を遣って話しかけてくれた。けれど、祖母との思い出話ばかりで、悲しみにくれていた小梅には逆に辛かった。

なので、実に数日ぶりの普通の会話である。

そんな些細なことが嬉しくて、小梅はここがどこなのかを聞こうと思っていたことを、またしても忘れてしまっていた。

ケネスのだんご騒動の後、商品のだんごも用意できたので、小梅は店内を掃除してから雨戸を開ける。

入り口側は全面ガラス張りになっているのだが、数日拭いていないので汚れていた。ガラスを磨いて開店中の印である暖簾を入り口にかければ、準備完了だ。

その様子をケネスが不思議そうに眺めている。

「どうかしましたか?」

「珍しい看板だな」

小梅の問いかけに、ケネスは暖簾を指さしながらそう言った。

日本ならば当たり前に見かけるものだが、見たことがないらしい。

「これは暖簾のれんといって、日よけも兼ねているんですよ。見たことありませんか?」

「ああ、初めて見たな。これに描いてある絵は意味があるのか?」

茶色地に「なごみ軒」と染め抜かれている文字を、絵だと思ったようだ。

「これは店の名前ですけど……読めませんか?」

——え? でもケネスさんは日本語を話しているよね?

日本語を話せるのに、日本の文字を見たことがないなんてあるだろうか。

その時、小梅はここが日本でも地球でもない可能性を思い出した。

「あの、ちょっと聞きたいんですが……。ここは一体どこですか？」
 ずっと気になっていたことを、小梅はようやく聞けた。

「……逆に聞くが、コウメはどこだと思う？」

質問を質問で返され、小梅は目を瞬かせながら答える。

「わかりません……。私がずっと暮らしていたのは、日本の田舎街にある丘の中腹でした。少なくとも一昨日までは、そこにこの店があったんです。けど昨日の朝、畑を見ようと外に出たらここにいて……」

言いながら、だんだんと小梅は俯く。話している自分でも、支離滅裂な話だと思ふ。

そんな小梅をケネスは店の中に促し、座敷へ上がる。

さらに店の隅に置いていた自分の荷物から、なにかを取り出して戻ってきた。

「これが、今ある中で最も正確な地図だ」

そう言ってテーブルに地図を広げてくれたが、そこには小梅が見たことのない形の陸地が描かれていた。

「今いるのはここ、レイランド国のガスコイン領だ」

ケネスが指さす場所に書かれている地名らしき文字も、やはり見たことのないものだった。

——でも、なんて書いてあるのかなんとなくわかる……

目にした文字の意味が、脳裏にパツと浮かぶのだ。これは一体どういうことか。

それに文字が違うということは、ケネスが話しているのは日本語ではないということだ。

「ケネスさんが話しているのは、何語ですか？」

「俺が使っている言葉は、大陸共通語だ。コウメが話している言葉も、綺麗な共通語に聞こえるが……」

——ああ、やつぱり……

ここは日本ではなかった。そして地球でもない、違う世界だなんて。

小梅は見ないようにしていた現実を、ようやく直視する。

「俺が数日前にここを通った時、ここには丘があるだけだった」

ケネスがそう語り出した。

「昔はこの丘の頂上に聖地があったのだが、今はなにもない。五十年前、突然その姿を消してしまったんだ」

「聖地、ですか？」

さらっと語られた中に、なんだかすごい言葉があった。

——ええ、ここってそんな大仰な場所なの？

丘の麓の遺跡だと思つたあの場所には、神殿みたいなものがあったのかも知れない。「実は、一昨日の夜にこの森で地震が起こつた。しかも、その際に聖地があつたこの丘のあたりが光つたんだ。そんなことがあつた後に建物が建っているなんて、御伽噺みたいなところだ。しかし現実として、ここにこの店がある。正直言うと、どんな恐ろしい生物が出てくるのかと、内心冷や冷やしていた」

全くそんな風には見えなかつたのだが、ケネスはミステリースポットへ肝試しに行くような気持ちだつたのだから、

けれど、それは小梅だつて同じこと。いわばミステリースポットのご真ん中に置き去りにされたようなものである。

「実際に出てきたのは君だつた。何故そんな不思議なことが起きたのだろうか？」

そんなこと、小梅の方が聞きたいくらいだ。

「どうしてここにいるのか、自分でもわかりません。私が一昨日まで暮らしていたのは、この地図のどこでもなくて、日本という国でした。それがおばーちゃんのお葬式が終わつて、翌朝気が付いたら、店はここにあつたんです」

小梅は話しながら祖母のことを思い出してしまつて、思わず俯く。忙しくしている時

は忘れられたが、やはり祖母がいないことが寂しい。

「祖母殿を亡くした直後だつたのか、それはお悔やみ申し上げる」

暗くなった小梅に、ケネスが深々と頭を下げた。

「辛い時期に押しかけるような真似をして、本当にすまない」

「いえ、私も気が紛れてホツとした部分もありましたから」

謝罪するケネスに、小梅は微かに苦笑する。

悲しみが癒える手段や時間は、人それぞれに違う。

小梅は、自分と祖母のことを知らないケネスと会話したことで、気分が変わつたのである。

「コウメの心を軽くするのに役立つのなら、良かった」

ケネスはそう言うと、ほんの微かだが表情を緩ませた。

——え、今ひよつとして、笑つたの？

初めて見るケネスの笑顔に一瞬気を取られた小梅だったが、それよりも気にすべきことがあるとすぐに思い直す。

「そういうえば、私、ここでお店をしていいんでしょうか？」

日本でだつて商売をするのには営業許可とか色々ある。ここが異世界なら、また違う

ルールがあるのではないだろうか。

「ああ、ここはどの領地にも属さない空白地だから、誰かに許可をもらう必要はないはず」「なら良かった」

小梅はホッと胸を撫でおろす。この「なごみ軒」は祖母と祖父が一緒にはじめた思い出の店なので、できるならば続けていきたい。

「それにこの道はなにもないから、文句の出ようもないしな」

「……もしかしてここ、あまり人が通らない道なんですか？」

食べ物屋にとつて人通りは死活問題である。

眉をひそめる小梅に、ケネスが頷く。

「以前は聖地詣での人々で賑わっていて、休憩処も多くあったらしいが、この五十年ですっかり荒れてしまった。おかげで今ではなにもない」

目玉スポットがなくなった観光地のようなものか。

それに聖地跡というのは、立地としてはとても微妙な気がする。聖地を大事にしていた信者たちが、怒って押しかけたりしないだろうか。

「やっぱりここで営業つて、信者の人とかを考えるとマズインじゃあ……」

心配する小梅に、ケネスは「問題ない」と言う。

「ここは神に見放された地とされているからな、もう来ないだろう。それに聖地はここだけではないから、余所の聖地へ行っているはずだ」

なんと、聖地とは唯一のものではないらしい。日本でいうパワースポットのなものなのかもしれない。

縁起の悪い土地ということ、人が避けるようになれば、聖地詣での人々を相手に商売していた店も閉店する。現在ではあまりに人が通らないので、盗賊すら出ないのだそうだ。

——本当に大丈夫なの？

話を聞いて余計に不安が募る小梅の耳に、ふいに物音が聞こえてくる。

ガラガラガラ。

慌てて外へ飛び出せば、一台の荷馬車が丘を登ってきていた。

——お客さんだ！

ケネス以外では、客第一号だ。

「いらつしやいませ！」

「珍しい、旅人が通るとは」

小梅について出てきたケネスが不思議そうな顔をする。

「ああ、良かった。やっぱり建物があった！」
御者台に乗った小太りのおじさんがこちらを見てそう言うと、店の前で荷馬車を停めた。

「こちらの主かい？」

おじさんはケネスを店の主だと思っただけでなく、小梅ではなく、ケネスに話しかけた。

——まあ、仕方ないよね。

背の高いケネスと小梅が並べば、まさしく大人と子供なので、そう思ったとしても無理はない。小梅は苦笑しつつ訂正しようとする、先にケネスが口を開く。

「いや、俺は客で、店主はこちらのコウメだ」

「おう、こりゃ失礼！ お嬢ちゃんの方だったか！」

おじさんは荷馬車から降りて、小梅に頭を下げた。

「馬を休ませる場所がなくて困っていたんだよ。すまないが、コイツに飲ませる水を分けてもらえないだろうか？」

「おだんごを買ってくれたら、あそこの蛇口の水を自由に使うてもらっていいですよ」

家の水道は丘の上の湧き水をひいており、この水が美味しいと近所でも評判だ。よく『水を持ち帰りたい』と言われるので、だんごを買いに来た客は汲んでもいいルールと

している。

このことを言うと、おじさんは「しつかりしているねえ」と笑う。

「そのオダンゴっていうのは、食い物かい？ さつきから良い匂いがするんだが……」

クンクンと鼻を鳴らすおじさんに、小梅は営業スマイルを浮かべる。せつかく通りかかった客を逃したくない。

「そうです。店内で食べてもいいですし、お持ち帰りもできますよ」

「じゃあ、店にお邪魔しようかねえ。ちようど休憩したかったところなんだ」

そう言うおじさんに、荷馬車を駐車スペースに停めてもらってから店内へ招く。馬にはバケツに汲んだ水を用意した。

「こちらどうぞ」

小梅はおじさんを座敷に通す。

「生憎、みたらしだんごしか用意できていないので、それとお茶のセットでいいですか？」

本来のセットはだんごよりどり三本と抹茶のセットなのだが、今はみたらしだんごで勘弁してもらおう。ちなみにだんごは一本百円だ。

「ああ、頼むよ」

おじさんが頷いたので、小梅は厨房に入る。

一方、店内をキョロキョロと見たり座敷の畳を物珍しそうに撫でたりしているおじさんに、ケネスが寄っていった。

「こちらの道を通るとは珍しいな」

「はあ、つい先日の地震で本街道が土砂崩れにあつてねえ。幸いにも巻き込まれた旅人はいなかったようだが、しばらく通れなくなつてしまつたんだ」

「それは初耳だ」

「道が復旧するのを待つわけにはいかないから、仕方なくこちらに来たんだよ。でも、旅路がきついに休憩する場所もないだろう？ 難儀していたから、ここに店があつて本当に助かつたよ」

二人のそんな会話を聞きながら、小梅はだんごに添えるお茶を点てる。お茶の用意が終つたら、みたらだんごの皿と一緒にお盆にのせた。

「どうぞ、おだんごのセットです」

小梅が皿と茶碗をテーブルに置くと、おじさんはそれらを興味深そうに眺める。

「串焼きに似ているが匂いは違うなあ。こっちの飲み物もずいぶんと緑色だねえ」

「この飲み物は抹茶と言ひんす。見慣れないと思ひますが、おだんごと合ひんすよ」小梅に勧められたおじさんは、半信半疑でだんごを手取る。そして、串から一つ口

に入れた直後、カッと目を見開いた。

「甘い、いやしょっぱい!? なんだこの不思議な味は!？」

その勢いのまま、慌てて二つ目を口に入れる。

「おお、噛むと蕩けるようだがしつかりと弾力もある。なんと複雑な食べ物なんだ……」

目を閉じてじつくりとだんごを味わつた後、おじさんは抹茶の存在にハッと気付いて一口飲む。とたんに、驚きと喜びが顔いっぱいに広がつた。

「神か、神の食するものなのだな!？」

「いやいや、普通のおだんごと抹茶ですから!」

ケネスと同様の激しい反応に、小梅は頬を引きつらせる。

「コウメ、金は払うので、俺もあのお茶と一緒に食べてみたいのだが」

一方で味見の時に抹茶を飲んでいないケネスが、だんごと抹茶の組み合わせに興味を示した。

「いいですよ」

だが、だんごと朝食を食べたばかりなので、抹茶とだんご一本だけにしておく。差し出されただんごを慎重に口に運んだケネスは、すぐに抹茶も味わう。すると、またしても衝撃を受けたような顔になつた。

「なんとという至上の組み合わせなんだ!？」

「そうでしょう、そうでしょう!」

ケネスの叫びに、おじさんが激しく同意する。

「これは、嬢ちゃんを作ったのかい?」

「……はい、私一人しかいませんから」

おじさんの問いかけに、小梅はちょっと前まで祖母と並んでだんごを作っていたことを思い出す。けれど、すぐに寂しさを追いやって笑顔で答えた。

「はあく、大したもんだあ」

おじさんはため息交じりに感嘆の声を上げる。

「食感といい味といい、人生初の体験だよ」

抹茶を一口飲み、ホウツと息を吐く。

こうしておじさんとケネスがだんごに満足したところで、支払いとなった。

「いくらかね?」

「四百円です」

小梅が値段を言うと、おじさんもケネスもきよとんとした顔をする。

——あ、お金のことを聞いてなかった!

答えた後でそのことに気付き慌てる小梅に、ケネスが問いかけてきた。

「ヨンヒャクエンとはヒャクエン四つ分の金額、という意味で合っているか?」

「え、あ、そうです!」

首が取れそうなほど勢いよく頷く小梅を見て、ケネスは落ち着けというように、ポンと肩を叩く。

「ヒャクエン一つではなにが買える?」

「えーと、安いパンが一つ買えますかね。ジュース一本でもいいですけど」

コンビニやスーパーでの買い物を出し、小梅は告げる。

「ならば、ヒャクエンは大銅貨一枚程度だ」

「では、大銅貨四枚ですな」

そう言っておじさんがくれた大銅貨とやらは、見たことのないお金だった。

——やっぱりこは、日本じゃない……

間違はなく異世界なんだと実感してしまった小梅は、ぐっと唇を噛み締める。

一人ならば大きな声で「どうして!？」と叫ぶところだが、今は接客が優先だ。気持ち
を静めて笑顔を作る。

「ありがとうございます!」